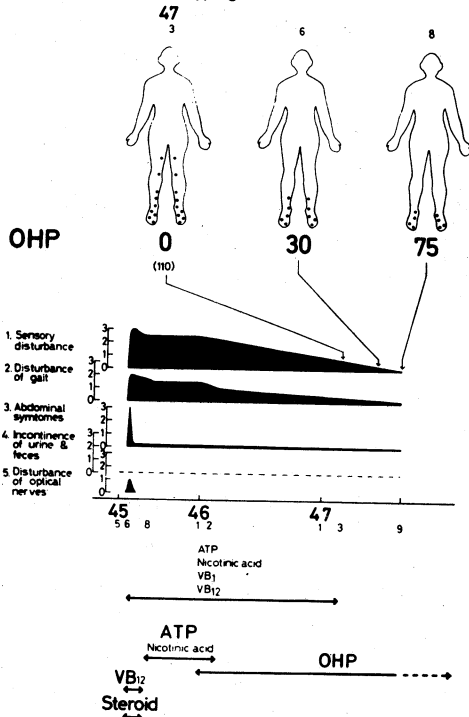


高圧酸素療法によるSMONの治療経験

都立広尾病院高圧酸素治療科 福島芳考 神山喜一

SMON患者のうち既に軽症化しているとはいつても症状が慢性固定化したものすなわち通院できる程度にまで回復したがなお疼痛を含む知覚異常、歩行困難等を残している患者を対象に、僅かな期間ではあるが本療法を試み、そのうち治療回数が予定の70~80回に達した3例につきそれぞれの治療経過を報告する。鈴木らの方法により高圧酸素治療装置を使って1日1回週5回連続的に治療をおこなひ、スモン調査研究協議会から報告された診断基準をもとに本療法による効果を検討した。

Case 1. T.H. 47 ♂

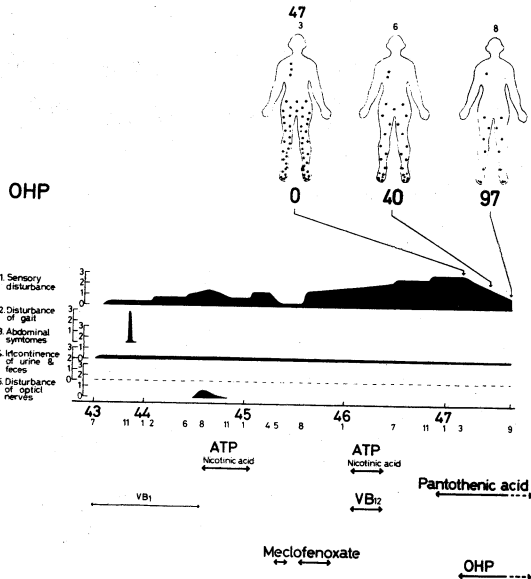


症例1. 46才男性. S45.5月キノホルムを服用後まもなく激しい下痢が始まって2~3週間続き 5/8~5/9の間に足底部から腰部まで一挙に痺れが拡がり歩行不能になった。同時に緑内障、書字困難、視覚異常などがありスモンの疑いで6~8月 Steroid剤VB12筋注を受け大腿部まで痺れが下降し不完全ながら独立歩行ができるようになったがその後症状が固定ししまい ATP=コチン酸の点滴等も受けたが効果がなく、S46.1月某大学病院でOHP療法の試用を受け結果的にはこれによって著しい症状の改善を認めた。すなわち1~3月26回の治療が終了した時にはかなり円滑に歩けるようになり、9月には膝下まで痺れが下降しS47.3月110回目では下腿の屈側から足底にかけて痺れを残すのみとなり裸足で疊の目と触知できるほどにまで改善した。その後当科を引き続きOHP療法を受け、初診時痺れは膝下後内側に偏在し足底にいくほど

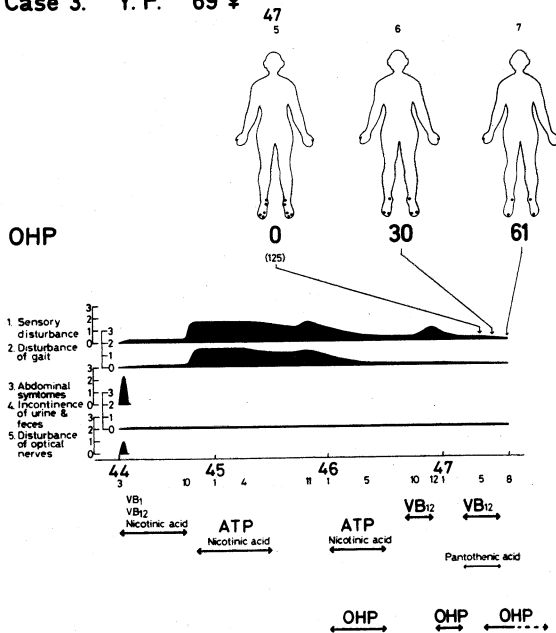
増強するということがあったが、最近(75回)では足底の内側縁に僅かに残るだけとなり歩行はもうろくのこと駆け足・跳躍等も完全にできるようになった。本症例はOHP療法のみによって最も著実な効果と認め得た caseの1つである。

症例2. 52才女性. S43.4月から軟便が続き7月から投薬中のキノホルムが増量され下痢は止まったが8月から痺れが始まった。初め足底から踝までに限局した軽度の障害であったがその後1段1段と痺れの範囲が上昇し、S44.6月には一過性ではあったが視力障害も起こった。そのときスモンを疑われ8月に某大学病院へ入院し ATP=コチン酸の点滴(66回)を受け、痺れはかなり軽減し視力もほぼ正常に戻った。S45.1月再び痺れが拡大し症状が増強したのと同点滴を3クール受けたが効果なく、4月からメフロキサシキ

Case 2. S.S. 52 ♀



Case 3. Y.F. 69 ♀



トの静注を受け一時的に著効をみたが2ヶ月目には逆に悪化するような傾向になった。その後VB<sub>12</sub>筋注、パントテン酸Ca静注を受けたがいずれも無効で症状の増強とともに一時鬱病状態にもなった。S 47.3月から当科にてOHP療法を始め、下半身と右肩甲部に痺れと灼熱性の痛みのために熟眠できないうことであったが40回目で全体的に痺れが軽減し膝蓋腱反射亢進が正常化し最近(97回)では肩甲部の痛みが消退し腰臀部から大腿伸外側の痺れが消え熟眠できると表情が明るくなった。

症例3. 69才女性. S 44.2月下痢が続くのでキリホルムを服用していたが3.3月から足底に痺れが起り一過性に視力障害もあった。スモンの疑いでVB<sub>12</sub>筋注を受けたが10月に痺れが急激に増強拡大して大腿部まで上昇し歩行困難になった。某大学病院の指示でATPニコチン酸臭滴を長期に続けていたがほかほかしい効果が得られず。S 45.12月別の某大学へ入院し65回のOHP療法とATPニコチン酸臭滴の併用を受け痺れは大腿部から踝のレベルまで漸時下降し歩行障害も著しく改善した。S 46.10月再び痺れが強くなったので別の某大学で60回のOHP療法を受けこの時も本療法が奏効して痺れは縮減し踝から足底に残るのみとなった。その後パントテン酸Ca静注、VB<sub>12</sub>筋注を続けたが目立った効果と認めずS 47.5月から当科にて再びOHP療法を始め61回おこなった。

今日痺れの範囲は更に縮小しやすかつま先に残るだけとなった。以上所定の回数OHP療法をおこなったその有効性が確実に認められた人のスモン症例について紹介したが、この他の症例についても特に知覚障害がかなりよくなっているものがある。しかし、これらの中には初めと同様、下痢便秘と交代性に繰り返す腹部症状、排尿排便時の感覚異常などの障害を依然として残しているものがあった。本療法を更に続けるといふことまで期待し得るものが検討して再度発表の機会を得たい。